

論文審査の結果の要旨

氏名：山本真菜

博士の専攻分野の名称：博士（心理学）

論文題名：ステレオタイプ抑制における代替思考の役割と個人差

審査委員：（主査） 教授 岡 隆

（副査） 教授 羽生和紀 教授 坂本真士

本論文は、人びとが対人判断のさいにステレオタイプを意識的に抑制すると、そのあとでかえってステレオタイプの判断を促進させるという逆説的效果を扱い、その逆説的效果を低減するために効果的な代替思考の内容と、その代替思考の利用しやすさの個人差について、社会的認知研究の観点から検討したものである。

本論文の理論編では、ステレオタイプ抑制による逆説的效果と抑制中の代替思考との関係に関する先行研究の知見を整理するなかで、対人判断の対象となる個人が属する集団、または、判断対象となる集団に関連した代替思考として、その集団に関するステレオタイプとは反対の内容である反ステレオタイプと、その集団に対して適合度が相対的に低い非優位ステレオタイプとが利用されやすいことを明らかにし、それぞれの代替思考の逆説的效果との関係を論じている。前者の反ステレオタイプについては、ステレオタイプと反ステレオタイプは連想強度が高いので、ステレオタイプ抑制中の代替思考として反ステレオタイプが利用されやすいが、その連想強度の高さによって、反ステレオタイプが代替思考として活性化されるとステレオタイプも同時に活性化されることになり、その結果、ステレオタイプのアクセス可能性が昂進し、逆説的效果が生じやすいという仮説を述べている。後者の非優位ステレオタイプについては、その集団に関連した思考であるため、優位ステレオタイプ抑制中の代替思考として利用されやすいが、優位ステレオタイプと非優位ステレオタイプは独立であったり、関連が小さかったりして、連想強度が低いために、非優位ステレオタイプが活性化されても、優位ステレオタイプが同時に活性化することは少なく、その結果、優位ステレオタイプのアクセス可能性の昂進は低く、逆説的效果が生じにくいという仮説を述べている。

理論編では、さらに、非優位ステレオタイプが、逆説的效果を生じさせにくい代替思考として有効であるとするれば、非優位ステレオタイプを利用しやすい認知特性が高いほど逆説的效果が生じにくいと考え、そのような認知特性のひとつとして、対人知覚における認知的複雑性があることを提案し、認知的複雑性が高いほど、非優位ステレオタイプを利用しやすいので、逆説的效果が生じにくいという仮説を述べている。

本論文には、これらの仮説を実証するための7つの研究が収録されている。研究1から研究3は、代替思考の内容と逆説的效果との関係を検討している。研究1では、実験参加者が、ある集団のステレオタイプを抑制するさいに、その集団のステレオタイプと一致しない成員から構成されるサブタイプを代替思考として利用すると、逆説的效果が生じやすいことを示している。この研究では、サブタイプは、その集団の一部の成員にしか適合しないため非優位ステレオタイプであると想定されていたが、事後的に別の参加者にサブタイプの内容の判定を求めたところ、実際には、サブタイプは、その集団の反ステレオタイプであったことが明らかになっている。その結果、研究1は、ステレオタイプの抑制のさいに反ステレオタイプが代替思考として利用されると、逆説的效果が生じやすいという仮説を実証するものと考えられている。研究2と研究3では、予備調査によって、ある集団に関するステレオタイプの適合度を測定することによって、その集団に関する優位ステレオタイプと非優位ステレオタイプを決定したうえで、優位ステレオタイプを抑制するさいの代替思考としての非優位ステレオタイプの効果を検討している。まず、研究2では、実験参加者が、非優位ステレオタイプを代替思考として利用すると、逆説的效果が生じにくいことを示している。研究3は、逆説的效果が生じる認知メカニズムとして、本研究で仮定されているステレオタイプへのアクセス可能性を直接に測定することを主な目的としながら、さらに付加的な目的として、代替思考

としての反ステレオタイプと非優位ステレオタイプとでその効果を直接に比較すること、また、非優位ステレオタイプのなかでも適合度の高い上位の非優位ステレオタイプと相対的に適合度の低い下位の非優位ステレオタイプとでその効果に違いがあるかどうかを探索することを目的としている。実験の結果は、代替思考として上位の非優位ステレオタイプを利用した実験参加者では、反ステレオタイプを利用した実験参加者や下位の非優位ステレオタイプを利用した実験参加者よりも、優位ステレオタイプへのアクセス可能性が低いことを示している。このことは、反ステレオタイプを利用すると逆説的效果が生じやすく、非優位ステレオタイプを利用するとそれが生じにくいことを示唆しており、そのような効果が生じる認知的メカニズムに、優位ステレオタイプへのアクセス可能性がかかわっているという仮説を実証するものと考えられている。なお、下位の非優位ステレオタイプは、上位の非優位ステレオタイプよりも利用しにくいと考えられており、それを、優位ステレオタイプを抑制するさいに代替思考として利用しにくいために、優位ステレオタイプのアクセス可能性が昂進するという結果は、ステレオタイプ抑制による逆説的效果の低減に有効な非優位ステレオタイプの特徴を特定するものと考えられている。

研究4から研究7は、非優位ステレオタイプを利用しやすい認知特性として、対人知覚の認知的複雑性を取り上げ、認知的複雑性と逆説的效果との関係を検討している。研究4では、実験参加者の非優位ステレオタイプの利用しやすさを直接に測定し、非優位ステレオタイプが利用しやすい実験参加者ほど、ステレオタイプ抑制による逆説的效果が生じにくいことを示している。研究5では、非優位ステレオタイプの利用しやすさを規定する認知的特性として認知的複雑性に焦点を当て、認知的複雑性が高い実験参加者ほど、非優位ステレオタイプの利用しやすさが高いことを示している。これらの予備的な研究を踏まえて、研究6と研究7では、認知的複雑性と逆説的效果との関係を検討している。研究6では、認知的複雑性が高い実験参加者ほど逆説的效果を生じさせにくいことを示している。研究7は、逆説的效果が生じる認知メカニズムとして本研究で仮定されているステレオタイプへのアクセス可能性を直接に測定することによって、研究6を追試し、認知的複雑性が高い実験参加者ほど、ステレオタイプ抑制後にそのステレオタイプへのアクセス可能性が低いことを示している。研究6と研究7の結果は、研究5で確認された、認知的複雑性が高い実験参加者ほど非優位的ステレオタイプを利用しやすいという事実を考慮しながら、認知的複雑性が高い実験参加者ほど、非優位ステレオタイプを利用しやすいので、その抑制したステレオタイプへのアクセス可能性が低く、逆説的效果を生じさせにくいことを示唆するものと考えられている。

以上の実証編を通して、本論文では、第一に、人びとが、ステレオタイプを抑制するさいに、反ステレオタイプを代替思考として利用すると、その抑制したステレオタイプのアクセス可能性が高まり、逆説的效果が生じやすいこと、第二に、人びとが、優位ステレオタイプを抑制するさいに、利用しやすい非優位ステレオタイプを代替思考として利用すると、その抑制した優位ステレオタイプのアクセス可能性が低まり、逆説的效果が生じにくいこと、第三に、人びとが、優位ステレオタイプを抑制するさいに、非優位ステレオタイプの利用しやすさには個人差があり、認知的複雑性が高い人ほど非優位ステレオタイプを利用しやすいので、その抑制した優位ステレオタイプのアクセス可能性が低く、逆説的效果が生じにくいという3つのことを、ほぼ実証できたと評価してよいであろう。とくに第二、第三の知見は、本論文独自の新たな知見であり、ステレオタイプ抑制のさいの代替思考の有効性に関する先行研究がこれまで十分に示すことができていなかった、有効な代替思考の内容を特定し、その認知メカニズムを明らかにするとともに、そのような代替思考の利用しやすさの個人差を特定した点で、この分野の研究を前進させるものとして評価できる。ただし、本論文は、第一に、本論文で仮定したステレオタイプの優位性を含むステレオタイプの認知構造に関する理論的精緻化の必要性、第二に、代替思考として利用された非優位ステレオタイプの活性化とそれに基づくステレオタイプの判断の可能性の問題の解決など、いくつかの今後の課題を残すことによって、この分野の今後の研究を刺激するものとなっている。

以上の成果は、社会心理学領域における学識の深さと新しい心理科学的研究を遂行する能力の高さを示すものであり、申請者が専門的な職務に従事するための十分な資格を有していると判断される。

よって本論文は、博士（心理学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成28年1月21日